
真剣で恋する 5 秒前!

斎藤雅夫

タテ書き小説ネット By ヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で恋する5秒前！

【Zコード】

Z0434Z

【作者名】

斎藤雅夫

【あらすじ】

三年前、風間ファミリーには一人の男がいた。名前は城下典一。風間ファミリーのまとめ役でもあつた彼は父親の都合により海外へ旅立つた。2009年春。大和達がゴールデンウィークに旅行へ行つていた最中、彼は九鬼従者部隊の入隊試験を受けていた。かつて過ごした日本に戻り、ある目的を達成させるためだ。その目的とは

プロローグ

昔、風間ファミリーには“五人目の男”がいた。

個性的な風間ファミリーの中で、あらゆる点で偉才を魅せる彼を、皆口々に『神童』と呼んだ。

若干十歳にして英語をマスター。韓国語、ドイツ語を通常生活で問題無いほどのレベル。更に数学では数学検定一級を取る。当時メティアから注目を浴びたが、全ての取材を断り、一部関係者に『神童』と呼ばれる。

武術でも、薙刀、剣術、ボクシング、サバットの各自有名な流派に弟子入りして、技術を全て盗んできた。

ただそんな彼でも『完璧』な訳では無い。極端なだけだ。

彼は興味を持ったモノを、学習するといつ点で天才的な学習能力を發揮する。

なので、韓国語、ドイツ語をマスターできないのも、学習する過程で飽きたのだ。いや、違うモノに興味を惹かれた言つても過言ではない。数学が優秀でも、漢字は苦手である。一度漢字検定を受けたが惨敗。

武術の技術が完璧でも、最強ではない。普段から体造りを活発を行っていないので、体力的には一般男子高校生並。戦闘となつても、戦いを長引かせれば、敗北は免れない。

そんな彼は、風間ファミリーでノ・2的存在で、暴走する風間を上手く落ち着かせたり、ニヒルな大和の話に付き合つたり、クラスから虐められていた京の心の傷を癒したり、百代の戦闘欲求解消の相手にさせられた。

それが彼、『城下典一』。

典一は十三歳の夏、空港で風間ファミリーのメンバー全員に囲まれていた。

今日で典一は日本を離れ、ヨーロッパにて新たな生活を始めることが決まっていた。事実上、今日を以つて風間ファミリーから脱退する。

「おいおい。皆そんな悲しそうな顔するなよ。俺まで泣きやうになつちまつよ」

なんて気楽的な声を投げかけるが、殆どのメンバーは下を、空港の地面を見つめている。

「あつちに言つたつて、電話やパソコンで連絡取れるだろ？ 今はネットが世界中に繋がつてているんだから」

典一はわかっている。風間ファミリーは自分と連絡を取れないので悲しんでいるのでは無い。典一の傍に居られないのが、辛いのだ。典一を心の拠り所としている京が、特に。

「ゴメンな、京。傍に居られなくて。でも我慢してくれ。今はお前が一人じゃない。風間ファミリーがいるだろ？」

京は地面を見ていた視線を、少し上に修正する。ギリギリ典一の顔が見えない境界線だ。

「うん。私は大丈夫。でも、それとこれとは関係ないよ。典一に会えないのが、寂しい」

「どうがないな。そんな感じで典一は両手を広げた。

「ほれ。最後の別れだ。別れの挨拶代わりに抱擁、てのはどうだ?」

京は迷わず飛び込んだ。愛しい彼の、これからずっと会えない彼の胸の中に。

それに吊られて他のメンバーも典一に飛びかかった。典一は押しかかるメンバーの体重に耐えながら、泣きながら笑った。

これが、偉才の神童城下典一が生涯初めて流した涙だつた。

父の仕事の都合で日本を離れていた典一の元に、久しぶりの日本人の来訪客が訪れていた。

前に風間が気分気のままに旅行していたついでに典一の元へ来訪したので一年振りだ。

日本人の名は『九鬼紋白』^{くきもんじゆ}。あの九鬼財閥の末妹であり、九鬼家政界対策部門のトップで在らせられる。

その紋白がわざわざ典一に会いに来たのは他でも無い、九鬼の従者部隊に空きが出来たのだ。その空きを埋めるべく、世界各国をスカウトの旅に出てこむ。

そんな彼女は日本にいる武神川神百代に数年前、唯一勝つたと言つ典一の元に足を運んできた。

しかし紋白は典一に会うなり残念そうな顔をした。

彼女が言うには、典一には輝きが無いと。

星の数ほどの武道家を見て来た紋白は、典一の目が武道家とは違う一般人並の瞳をしていると。輝きの何もかもない、墮落して夢も希望も持たぬ人間の目だ。

だがまあ当り前であろう。

典一には今の所興味を持つモノが一つも無い。

楽しそうな事を全てこのドイツでやりつくして、暇を持て余らしていた。

一通りの球技やスポーツは勿論、勉強も物理や化学、そしてギターや音楽関係にも手を出してインティマイズながらも固定ファンが付くほど上達。だが全てにおいて、途中で飽きたのだ。スポーツは昔百代と戦った時ほどの緊張感や勝利した時の快感を超えられず、勉学も大学院レベルまで極めたが飽きて、音楽は歌いたい曲を歌つてスッキリしたと。

今は典一の言う充電期間中なので、毎日毎日暇そうにネットで面白

そういうのを探したり、学校の部活動の助つ人として体を動かしているだけだ。

そんな典一に会つても、彼の持つ魅力に気付く者などいない。

「……一応これ渡しておいで」

紋田は護衛役であるクラウディオに指示をして、一枚の紙を典一に渡した。

その紙は『九鬼家従者部隊入隊案内』と書かれた一枚のポスターであつた。今回従者部隊の戦闘に特化した者の空きが出来たので、世界各国の有名な道場やジムにこれを配つてある。なので入隊試験では相当な手練れが世界各国から参加すると予想される。

「従者に成れると、何か特典でもあるんですか?」

「うむ。賞金か、もしくはその者の能力に見合つた優遇をしてやろう」

典一は考えた。思考した。妄想した。考察した。瞑想した。思慮した。思索した。黙考した。思い巡らせた。

そして、昔成し遂げたあの快感を思い出した。

父の海外出張でたつた三度で終わつてしまつた、百代との死闘の末の決戦を。

あの時は楽しかつた。敗北させられた百代に、厳しい修行を重ねて勝利したと思つたら、たつた一週間で自分よりも強くなつた百代を

相手にして、一回目の敗北。勝つて負けて勝利して敗北するライバル関係が永遠に続くと思っていた、あの日を。

忘れてしまっていた。この数年間くだらないことに興味を持つてやつていたからだ。

典一は思った。

そつか。アイツと出会ったから、他のモノに、戦闘以外に強い興味を示さなかつたのか。

だから俺は何をやつても中途半端なのか。

これは百代と完全な決着をして終わらせないと、他のモノに熱中できなーいな。

いつもの典一に戻つた。

否、

本来あるはずべき姿の『城下典一』になつた。

彼は紋白達が出て行つたあと、支度を始めた。

九鬼従者部隊に入隊する準備だ。^{なま}鈍^{なま}りに鈍^{なま}つて鈍^{にぶ}くなつた身体を鍛^{にぶ}え直すためだ。

プロローグ（後書き）

はいはこどりも。斎藤でござります。

勿論、斎藤は偽名でござります。一瞬で思いついた適当な名前です。今回ちょっと作者の都合で削除したこの作品でござります。以前お気に入りに登録していた皆様、申し訳ございません。

これからは毎週日曜日には更新する予定です。

今回のプロローグは2000字程度ですが、次回からは最低でも五千字は掲載します。

感想などがございましたら、気軽に書いちやつてください。

ですが『京は大和の嫁だろ』なんて野暮なツッコミは全面拒否でござります。

それではまたごしゃづ~~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434z/>

真剣で恋する5秒前!

2011年12月1日19時45分発行